

# 今、世界史で何が議論となっているのか(1)

金澤 周作

20世紀末以降のアカデミズム歴史学において、これまで当然の前提にしてきた歴史を説明するための諸概念の妥当性に疑問符が付され、一見客観的な歴史叙述にひそむ恣意性や目的論が暴かれ、とくに西洋の白人の中産階級の男性の価値観に基づく歴史像がきびしく批判されるようになってきている。いわば、シンプルに世界の歴史を一望のもとに理解させてくれる高校教科書の理想の路線とは逆をいっているのである。以下、教科書にも多少言及のある、西洋史を震源とする4つのトピックについて現状を紹介するが、高校の現場にいらっしゃる先生方におかれては、こういう見方もあるということを念頭におきながら、あえて明快な世界史の核——あとで廃棄されるかもしれないがそれなくしては歴史像を育てていけない心棒——を若い世代に教えていくことが大切ではないかと思う。記憶ではなく思考を鍛える歴史教育のためにも、教科書の示す強力な定説に対して異論をぶつける以下の小論が、教室で歴史像をふくらませるヒントを提供できていればよいと願っている。

## 「危機」の世紀

過去を振り返り、特定の世紀に突出した「危機」を見出し、その原因や結果を考える研究がある。たとえば、古代ローマ史でいうと、五賢帝時代のあとに続く軍人皇帝時代の「3世紀の危機」、中世ヨーロッパ史では百年戦争や黒死病の流行に象徴される「14世紀の危機」、そして三十年戦争やイギリス革命で知られる「17世紀の危機」である。いずれも高校教科書でいくらか記述がある。

五賢帝の善政がとだえたから政治秩序が瓦解した——生産力を上まわる人口増の圧が限界をこえた中世後期に戦乱が頻発し疫病で人口が激減した——ヨーロッパでは古い封建的な政治的・経済的構造が、新興の資本主義的活動の発展をはばんだので、その矛盾が爆発した——。このように原因を論じる研究者もいれば、3世紀の危機がローマ帝国の衰亡と中世的世界の誕生をうながした——14世紀の危機の苦難のなかで新しい近代国家が準備された——17世紀の危機が18世紀西欧の経済成長と産業革命の前提となった——。このように結果を論じる研究者もいる。また、危機論が狭い地域に視点を限っていることを批判して、3世紀の危機を西アジアやイン

ド、より東方の中国との関係で理解したり、14世紀の危機を世界的な疫病伝播のなかで考察したり、17世紀の危機を小氷河期という地球規模の現象と結びつけて明清交替や寛永の大飢饉なども視野におさめたりと、「危機」を位置づける文脈を広げる研究もなされている。

以上のように、過去の特定の時空間に「危機」のラベルを貼り、集中的に史料分析をすることによってはじめて得られる知見は確実に存在する。そもそも、過去はそれ自体では雑多なできごとの集塊、カオスである。後代から振り返る際には、事象の取捨選択や実証に裏打ちされた大胆な特徴づけが不可避である。これまでの研究者がおこなってきたラベル貼りは、思考を停止させるのではなくむしろ創造的に駆動するための手段であり、その学問的成果は高く評価しなければならない。ほかの地域や時代に「危機」を見出すこともできるだろう(はたして現在はどうか)。しかし他方で、めだつ指標を過大に評価して「危機」を見出すのはおかしい、前後の時期と比べて当該時期がとくに「危機」だと断言することはできない、「危機」には否定的で「安定」には肯定的な評価をするのは単純すぎる、と批判する研究者もいて、それらの意見にも相応の理はある。また、ローマ帝国や近代国家や産業革命に特別な意味を読み込む姿勢は、ヨーロッパ中心主義的といわれても仕方がない。とはいえ、世界史の理解をうながすために、ほかの地域時代にも対象を広げ、「危機」を積極的に定位して考えることには、歴史的想像力を鍛える効果があるのではないか。

## 時代区分

西洋史はたいてい、先史時代から始まり、つぎに古代・中世・近世・近代・現代というように時代を区分する(近代以降は「世界」の尺度になる)。これは、様々な地域の歴史研究で採用されている時代区分を最大公約数的にまとめたもので、カオスたる過去を合理的に把握するうえでも便利である。しかし、すべての地域に同時に同じ時代区分を適用できるわけではないし、この時代区分の仕方が万古不易の固定されたものではないことも銘記すべきである。たとえば、「現代」がおおよそ第一次世界大戦あたりから始まると考えると、その長さは、毎年1年ずつのびるのであり、いつか、第一次世界大戦を「現代」とはみなせない時がやってくる。そうになると、第一次世界大戦、そしてやがては第二次世界大戦は、ひとつ前の「近代」に繰り込まれるか、近代と現代のあいだに設定される別の区分に入れられるかもしれない。そして、さらに過去化した中世と近世は、ひとくくりにはされるかもしれない。

世界史教科書では、西洋史のパートを除く地域について時代区分があまりなされていないように思われる。結果として、西洋史の区分がモデル化してしまい、そこでの基準にそって世界史が区分されるようなかたちになる。中世として区切った時空間に「封建制」をみつけようとしたり、中世から近世への移行を準備する「ルネサンス」的な現象をほかにも求めたり、啓蒙や工業化や国民国家化というヨーロッパで生じた現象を全地球的に「近代」の指標にしたりするのである。

ここで留意してほしいのは、時代区分は過去をよりよく理解するためのラベルにすぎない、つまり完璧ではない、ということだ。現行の時代区分でも過去はよく理

解できるので、まずはおさえておくべきだが、そのうえで、つぎのような新区分が提案されていること、そして学界では徐々に置き換わりが進んでいることも覚えておいたらよいのではないか。

たとえば、西洋史ではオーソドックスな古代と中世のあいだに「古代末期」という新区分——たんなる古代の末期ではない——を設ける潮流が優勢になっている。衰退しつつある古代でもなく勃興しつつある中世でもない、それ自体に独特の個性がある「古代末期」である。文脈は異なるだろうが、同じような視点から、ほかの地域における古代と中世の境を再考することができるのではないか。また、「長い中世」という提案もなされている。通常、宗教改革が始まる前、15世紀が終点になっている「中世」は、キリスト教の支配力と領主制の優勢という物差しではかれば、フランス革命前まで、つまり18世紀後半まで延長できるという議論である。ほかにも「長い○○世紀」「短い○○世紀」という、100年の枠にこだわらない切り取り方がある。地理的範囲を広げたり狭めたりすると、ひとくくりにしやすい時間幅がかわってくる(身分や階級、ジェンダーに注目しても同様だろう)。西洋以外のほかの時代や地域や地理範囲と比較してみると、歴史の理解がより深まるのではないだろうか。

## 大西洋黒人奴隷貿易

世界史の教科書におけるヨーロッパ史の箇所、15世紀末から19世紀半ばに、白人がアフリカの黒人を船で大西洋を横断して新大陸に輸送し、サトウキビやタバコの大農園などに奴隷として売却したできごとは重視されている。1200万人以上ともいわれる黒人を、その意思に反して強制的にアフリカ大陸から引き離し、劣悪な環境の船で輸送して、奴隷として売買したり使役したことにより、白人社会は全体として莫大<sup>ぼくだい</sup>な利益を得た。学界でも長らく熱心に取り組まれてきたテーマであり、どのような国々や人々が関与したのか、奴隷船の「商品」管理と労務管理はどうなっていたのか、奴隷貿易や奴隷制度の利潤率はどれほどだったのか、奴隷の労働条件・生活条件はどのようなものだったのか、男性と女性と子どもと老人とでどう違っていたのか、奴隷たちの抵抗にはどのような形態がみられたのか、なぜヨーロッパでは長らく黒人奴隷貿易・奴隷制度への批判が出なかったのか、奴隷貿易・奴隷制度を廃止する動きはいつからなぜどのように展開したのか、など、ありとあらゆる側面から史料に基づく検討がなされている。ただ、ここでは、加害者が白人で被害者が黒人という構図はゆるがない。

これに対して、アフリカ大陸でヨーロッパの奴隷商人に黒人を売却した現地の黒人の主体性に注目する研究や、自由の国イギリスの海軍が長らく実施してきたイギリス臣民たる船乗りの強制徴募の再検討、ヨーロッパのキリスト教徒ではなく、インド洋や黒海沿岸域のイスラム教徒がおこなっていた白人・黒人の奴隷貿易、あるいは東アジアでの奴隷的な人々の売買の事例を掘り起こす研究が増えてきている。つぎのような興味深い対象もある。大西洋横断黒人奴隷貿易に白人がいそしんでいたのとちょうど同じ時期に、キリスト教徒の白人は地中海で北アフリカのイスラム教徒の海賊ないし私掠者によって虜囚とされ、ガレー船漕ぎなどの奴隷労働に従事

させられ、あるいは身代金と交換する商品として利用されていた。その数、累計で100万人をこえたという説もあり、西洋世界は北アフリカのイスラム教徒の野蛮さと暴虐をさかんに言い立てた。もっとも、キリスト教徒の方も、イスラム教徒を捕まえては奴隷にしていたし、ずっと多くの黒人を奴隷化していたのだが。

以上のような諸研究は、古代・中世はいうにおよばず、近世・近代においても、奴隷貿易・奴隷制度が西洋の白人の専売特許ではなかったという気づき、また、奴隷といっても地域や時代によってその法的、社会的な位置づけはかなり異なっていたという洞察をもたらしてくれる(現在の様々な奴隷的境遇に思いを馳せることもできる)。こうした複雑な事情を念頭において、近世・近代の西洋人による奴隷貿易や奴隷制度、および彼らによる人道主義の発露(あるいは経済的打算)とされる奴隷貿易・奴隷制度の廃止運動を見直してみたらどうだろう。いったいだれが加害者でだれが被害者なのか。西洋中心史観を乗り越える視座が得られるテーマである。

## ナショナリズム

一般的には、フランス革命の成果を敵対的な諸外国から防衛せよとの機運の高まりをきっかけにナショナリズム(国は言語的あるいは文化的に均質な国民によって構成されるべきで、その実現・維持が何より重要という思想)の火がつき、19世紀にはヨーロッパや北米およびラテンアメリカで徐々に国民国家が建設され、たとえばハプスブルク帝国の支配下にあった諸民族が自治や独立の道を模索し、中東やインドや東アジア諸国でも同様の動きがみられるなどした、と説明される。そして、第一次世界大戦後には(ヨーロッパ限定で)民族自決原則が認められ、20世紀はその線にそって、アフリカをはじめかつて植民地であった地での国民国家化が進んだとも。20世紀末からの急激なグローバル化は国境の垣根を下げていくかにみえたが、現在でも自国(民)第一主義や人種差別や外国人排斥の動きは洋の東西を問わず、広く看取される。しかも、どうしても諸国興亡史的な構成をとらざるをえない高校世界史では、近代以降の国の枠組みを前提にしてそれぞれの国の「発展」を語る部分がかかりを占める。換言すれば、ナショナリズムのおもな対象であるネイション(国民・民族)を、たとえば日本人にせよ中国人にせよフランス人にせよドイツ人にせよ、非常に長く一貫した歴史を有している実体とみなしがちになる。その結果、世界史教科書そのものがナショナリズムに影響された語りになってしまうという問題を内包している。日本史教科書の場合はいうまでもない。このようにいくつもの意味で、ナショナリズムは世界史を理解するうえでは必ずすことのできない要素である。

ナショナリズムないし国民意識の歴史的な由来をめぐって、1980年代から活発な研究がなされてきた。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』(1983年)はその端緒であり、東南アジアやラテンアメリカの諸事例もふまえつつ、ネイション(国民・民族)といういかにも自然なまとまりは、近代以降、新聞などの出版物の流通範囲とほぼ一致するかたちで自覚化されるようになった(にすぎない)のだと主張した。人々の「想像」がネイションという「共同体」を成立させたという議論である。これを補強する仕方で、もともと存在しなかったネイションが、近代以降に、いくつ

かの段階やきっかけで構築されたという立場をとる近代主義の歴史研究が進んだ。そして、これとは対照的に、ネイションの種は近代のはるか以前にさかのぼる文化・慣習などを共有する人的まとまり(エスニックな集団)に求められ、それが覚醒していくのだという立場をとる原初主義の歴史研究も、説得的に展開した。

これらはどれも、ナショナリズムの呪縛力の強さを前提にした議論である。しかし、ナショナリズムが必ず人々を魅了してしまうといってしまうよいかという批判が出てきている(グローバルやトランスナショナル、ローカルといった視点もその一部だがここでは割愛)。とくに19世紀末から20世紀前半にかけての東中欧各地のナショナリズム熱は、これまでの諸研究が明らかにしてきたように、無数の史料から読み取れる。それはたしかなのだが、「ナショナル・インディファレンス(国民・民族(に関わる事柄)への無関心)」論をとなえる近年の研究者たちは、こうした史料上に、ナショナリストたちが、どれだけ熱心にプロパガンダしても思ったように影響されない人たちの存在を執拗に非難する言説を見出した。ナショナリストたちは、彼らの態度を、地域主義、コスモポリタニズム、カトリシズム、社会主義、郷土偏愛、二言語使用、異種結婚、日和見主義、不道徳、後進性、頑迷固陋、虚偽意識、といった様々なレッテルを貼って糾弾した(このレッテルの逆をナショナリストは期待していたのである)。言い換えるなら、ナショナリストたちは、彼らにとって望ましいネイションという「想像の共同体」に組み込まれない「想像の非共同体」が残存していると考えたがゆえに、一層活動に邁進したのである。

そのような「非共同体」は実際に存在したのだろうか。そしてその非共同体はもともとあったのか新たに形成されたのか。現代に向かうにつれて「無関心」は払拭されていったのか。東中欧以外にも、あるいは19世紀末より前や20世紀半ば以降にも観察できる現象なのか。特定のネイションへの帰属意識は固定的なのか流動的なのか。人が自覚しようがしまいがその人は自動的に、(国籍とは別の意味で)どこかのネイションに割り振られているものなのか。ネイションへの帰属意識を強固にもっている人とそうでない人の割合と影響力の程度は比例するのか。帝国やグローバル化とはどう切り結ぶのか——。こうして、ネイションは近代の産物なのか時をこえた実体なのかという二択の論点に加え、そもそも人は特定のネイションに第一のアイデンティティをささげているのかという問いが加わり、私たちが歴史をみるレンズの種類は格段に豊かになってきている。

## おわりに

以上で紹介した諸論点の多くは、監修した2020年刊行の『論点・西洋史学』(ミネルヴァ書房)でも触れられている。全部で139の、あくまで西洋史に関する論点ではあるが、大半は世界史的に敷衍<sup>ふいん</sup>することのできる普遍性をもった問題を提起している。学界の最先端の研究は、総じて専門家以外には些末にみえるものだが、それらを圧縮したかたちであられる「論点」は、これからの高校世界史を主体的に教えたり学んだりするうえで、必要不可欠なヒントを満載している。

(かなざわ・しゅうさく／京都大学大学院文学研究科教授)